

電子情報環境下の利用者教育：大阪女学院短期大学における“研究調査法”必修科目としての実施事例報告

コーンハウザ由香子

木下みゆき

The User Education in an Electronic Environment : A Case Study of “Research Method” as a Required Course at Osaka Jogakuin Junior College.

Yukako Kornhauser

Miyuki Kinoshita

抄 録

自立した利用者の育成という利用教育の目標は変わらないにもかかわらず、電子情報源の導入によって利用教育を取り巻く環境や内容は大きく変化した。本稿では、情報機器操作経験が電子情報源利用に与える影響、大阪女学院短期大学における“研究調査法”の電子情報源利用に与える影響、“研究調査法”の図書館利用に与える影響に焦点をあてて、3回のアンケートを基に調査・分析を行った。その結果、高校教育以前の情報機器操作経験の有無が、電子情報源の習得の初期段階において影響すると思われること、また、“研究調査法”の受講が技術的には組織的な情報収集・提供方法の習得を促し、心理的には情報活動に対する積極性を養っていることがわかった。

キーワード：利用教育、電子情報源、情報機器操作経験、図書館利用、情報リテラシー

(1998年9月16日 受理)

Abstract

One objective of user education, to make people become independent users, has not been changed. However, the content and environment of user education have changed significantly since electronic sources were introduced. In this article, three major points were examined: how the difference between college students with and without computer experience during K-12 education affects their use of electronic information sources; how the “Research Method” course affects the students’ use of electronic sources; and how this course affects their use of libraries. These points were analyzed by distributing three questionnaires at various stages of the course in order to compare changes in students’ attitudes and skills. The conclusion was that the students’ computer experience does make a difference in operational skills, and attitudes toward electronic sources. Furthermore, by taking this “Research Method” course, the students improved their skills in seeking information systematically, and gained positive attitudes toward information seeking activities.

Key words : user education, electronic sources, computer literacy, library use, information literacy

(Received September 16, 1998)

I はじめに

近年、電子情報源の図書館への導入に伴い、大学図書館を中心に利用教育への関心が高まっている。まず日本の状況を見ると、特に公共図書館においてはおおむね利用教育の必要性を認めながらも、その是非やあり方に論議を呼んでいる⁽¹⁾。一方、大学図書館ではその教育機関としての位置付けから、何らかの形で利用教育が行われている⁽²⁾。しかし、大学における図書館の利用教育の形体は圧倒的に図書館主催のものが多い。利用教育を教科の一部あるいは独立教科目として実施している大学・短期大学は非常に少なく、情報化社会における情報リテラシーの必要性が論じられるなかで、その普及が広く望まれるところである。

これに対して、米国では書誌利用指導 (Bibliographic Instruction, 以下 BI とする) の有効性への疑問が投げられてもいるが⁽³⁾、BI の正当性が論じられていることのほうが多く⁽⁴⁾、BI が図書館サービスの一部として定着している。また、利用教育の新しい動きとして教育理論・認知科学を取り入れた研究も進んでおり、その代表的なものとしては不確定性の原理 (Uncertainty Principle) を導き出した Carol C. Kuhlthau の一連の研究⁽⁵⁾などがある。これらは福永によって日本にも紹介されている⁽⁶⁾。また、米国で BI を語る時に必ずといっていいほど論じられるのが批判的思考 (Critical Thinking) の重要性である⁽⁷⁾。これについては平久江が米国の動向を紹介しながら、日本の図書館利用教育への応用への可能性を模索している⁽⁸⁾。

このように、電子情報源をめぐる利用教育の環境も内容も様変わりしてきた。しかし、利用教育の目標は変わらない。それは利用者が“自立”して情報の収集・評価・提供を行える、真の情報リテラシーを持ち得るようにすることであろう。日本図書館協会によると「図書館利用教育とは、すべての利用者が自立して⁽⁹⁾図書館をふくむ情報環境を効果的・効率的に活用できるようにするために、体系的・組織的に行われる教育」(JLA838)としている。同協会が作成した『図書館利用教育ガイドライン：大学版』⁽¹⁰⁾もこの定義に基づいて作成され、具体的にその目標を5領域に分けて記述している。本稿で取り扱う“研究調査法”も、後に詳述するが、このガイドラインでいわれている領域4～5までをもその内容に盛り込んでいる。独立教科目としての利用教育、“研究調査法”が情報の収集・評価・提供を効果的に行うために有効であることを検証するためには包括的な調査が必要である。本調査はその一段階として、我々を取り巻いている電子情報環境を念頭に置いて、3回のアンケートを基に時間的推移による変化にも着目しながら、調査・分析を行ってみた。この調査で特に焦点をあてたのは、①情報機器操作経験が電子情報源利用に与える影響、②“研究調査法”の電子情報源利用に与える影響、③“研究調査法”の図書館利用に与える影響の三点である。現在の“研究調査法”受講生は、情報機器操作教育を高等学校教育までに必ずしも受けているとはいえない、端境期に属する世代である。そのため、大学入学以前の情報機器操作経験の有無によって、その後の電子情報源の操作に何らかの格差ができるのではないかという疑問が浮かぶ。また、情報機器操作経験が電子情報源の利用に

際して肯定的な因子となり得るのだろうか。さらに、“研究調査法”を受講することが、技術的・心理的に情報活動全般に何らかの影響を与えているのではないかと考えられる。

Ⅱ 過去に行われた調査・研究

大学における利用教育の実態調査のひとつに、1987年に実施された日本図書館協会の調査がある。利用指導を教科の一部として行っているのは、4年制の国・公・私立大学のうち何らかの形で利用指導を行っている266館中30館（11.3%）である（日本119）。1995年には廣田と上田が大学図書館における電子情報源に限った利用教育の調査を行っているが、その中で利用教育を独立した学科目として実施している図書館は774館中わずか6館（1.0%）という結果が報告されている（89）。また、国立・私立短期大学で教科の一部として実施しているのは、1992年の調査では、何らかの形で利用指導を行っている111校中16館（14.4%）で、独立教科としてカリキュラムに組み込んでいるのは111校中8館（7.2%）という結果がでている（安達74-75）。このように利用教育を独立した学科目として開講している大学・短期大学はまだ少数派である。その取組みが少ない理由として電子情報環境の中での利用教育には、コンピュータ演習室などの設備やそれに伴う人員の確保など、印刷情報環境における利用教育よりも経費がかかることが一因だとの指摘がある（廣田85）。従って、電子情報源のみの指導で図書館主催の利用者教育の事例報告はあるが、『図書館利用教育ガイドライン：大学版』（1998）でいう領域4～5に分類されるような利用教育、しかも独立学科目としての利用教育の事例報告は皆無に等しい。また、電子情報源の指導に限ってみると、専門科目として行われている場合のほうが多く（日外128）、本稿で扱う“研究調査法”のように電子情報源をも含めた利用指導が教養科目扱いで必修科目となっている事例はより少ない。例外として、菅原によって報告された文教大学女子短期大学の事例がある⁽¹¹⁾。これは“文献検索法”の講義を教養科目の総合講座の一部として3回シリーズで行った上で、受講生に行われたアンケート調査の結果を報告したものである。この報告を読む限り、どの程度の電子情報源の利用指導がどのような形で実施されたかの記述はない。また、論文・レポートの作成法の指導に講義1回分が費やされているが、小論文を実際にまとめさせることを通しての情報の探索・収集や情報の利用・記録を習得させるようにはデザインされていない。従って、後に詳しく述べるが、本稿における“研究調査法”とは性質を異にしている。

また、情報機器操作経験の面から情報教育の現状を扱ったものには高木によるアンケート調査がある⁽¹²⁾。これは1994～1997年度に愛知淑徳大学図書館情報学科に入学した新入生を対象に、初等・中等教育でどの程度の情報教育受講経験があるかの推移を比較した調査であり、受講経験者と未経験者の混在が情報学科での講義の進行に支障をきたすとし、両者の知識格差をどのように埋めるかを今後の課題とする報告がでている。しかし、この両者の知識格差がコンピュータを媒体とするその後の情報検索の習得にどのように影響するかの詳細な報告はなされていない。

Ⅲ 必修科目としての“研究調査法”

A “研究調査法”

大阪女学院短期大学で開講されている“研究調査法”は1998年度より1年生全員の必修科目となった。その概要は「大学で学習する場合に必要な基本的なりサーチ・テクニクの訓練をし、在学中の学習に役立てる。同時に卒業後の生活で必要となる情報の入手手段の基礎を身につける」とし、最重要目標を「主体的に情報を収集し、評価し、効果的に提供する訓練」(大阪L-20)に置いている。従って、生涯にわたって役立つ能力を身に付けるといふ目標のほか、英語科の単科短期大学である大阪女学院の学生が、特に2年次で課題に取り組んで日・英語のレポートを作成するにあたり、効果的かつ、効率的に情報の収集・利用ができるようにデザインされている。

講義の回数は、本学は3学期制を採用しているため、1学期につき10回で、一回の授業は140分である。授業内容の詳細については別紙『研究調査法1998年度スケジュール』を参照されたい。ただし、このスケジュールは1998年度春学期のもので、秋学期には改良され多少の変更がある予定である。授業形体は原則として講義・デモンストレーション・実習の3本立てで進められた。学生に与えた課題は、ワープロ実習プロジェクト(ワープロの利用による作文の作成)、電子情報源(OPACや『J-BISC』、『雑誌記事索引』、*Readers' Guide to Periodical Literature*, *World Book Encyclopedia*などのCD-ROM)を利用した練習問題、情報収集実習プロジェクト(書誌・索引誌の他にレファレンス・ブック、新聞記事、インターネットなども利用)、日本語の小論文作成とその口頭発表である。このうち小論文作成は日本図書館協会制作のビデオ教材『図書館の達人：レポート・論文のまとめかた』第6巻⁽¹³⁾における10のステップに従って行わせた。これらに加え、批判的な資料の読みとして新聞記事、図書の抜粋を利用した授業を2回行った。評価は毎週の課題、期末試験、小論文によって行った。

B 教育環境

教育環境として、教員・設備・サポート体制などがあげられる。教員構成は、専任教員1名、非常勤教員2名で担当した。受講学生は春学期には196名で、秋学期には残りの約200名が受講を予定している。教室はコンピュータ演習室5室のうち2室を使用し、両教室には学生用マッキントッシュ端末が各35台ある。従って、受講生全員が1台ずつの端末を利用できるようになっている。教師用には両教室ともマッキントッシュ端末各1台、ウィンドウズ端末各1台、プロジェクター・スクリーンとビデオの設備がある。教師用・学生用共にマッキントッシュ端末は図書館OPACとインターネットに接続している。ウィンドウズ端末は図書館OPACとCD-ROMサーバーに接続しており、インターネットにも接続している。これらの端末のうち教師用マッキントッシュとウィンドウズ端末はプロジェクター・スクリーンに接続しているので、これを使用してデモンストレーションを行った。従って、学生が授業中に演習を行えるのはワープロの操作とOPACの利用法、イ

インターネットによる情報探査で、機器の制約上、CD-ROMの操作はデモンストレーションと宿題とされた練習問題によって習得させた。

これに加えて、講義を行う上でのサポート体制として教務部、図書館、CALL(Computer Assisted Language Learning)があげられる。教務部には毎週の配布資料の準備と同時に、臨時に必要なアシスタントの手配にも迅速に対応する形での理解と協力を得ることができた。図書館からは多大な人的、資源的協力を得ることができた⁽¹⁴⁾。図書館の人的協力としてはそのスタッフ9名(うち専任司書4名)の理解と援助が大きい。また、資源的には学生が課題に取り組むための環境として、OPAC専用機11台、インターネットやOPACにも接続可能なCD-ROM用端末8台が設置されている。さらに、CALLには専任1名とパートタイム2名のスタッフが常駐して、コンピュータ演習室の管理やコンピュータ操作の学生用マニュアル作成を含む、インターネット、ワープロ利用全般の指導の補助的な支援を課外時に受けている。演習室以外に学生用のコンピュータはリーディング・ルームにインターネットやOPAC、CD-ROMに接続可能なウィンドウズ12台があり、学生に開放されている。

ワープロ実習授業のあった第1回目の授業には各クラスに2名、ティーチング・アシスタントとしてテンポラリー・スタッフが入った。特に図書館とCALLのスタッフとは頻繁に連絡を取り合い、実習現場での学生の進捗状況を把握し、授業に生かしていくことに努めた。

IV 調査方法

A 調査目的

今回の調査の目的は、本学における“研究調査法”が情報の収集・評価・提供を効果的に行うために有効であることを検証する一段階として、①受講が電子情報源の利用や図書館の利用に与える影響を調査すると同時に、②高等学校教育までの情報機器操作経験が電子情報源利用に与える影響をも調査することである。

B 調査方法・調査時期

調査は1年生の必修科目“研究調査法”を1998年度の春学期に受講した学生全員、196名を対象に3回のアンケート調査によって行われた。第1回目は出身高校、高校までの情報機器操作経験の有無などの背景的な情報を得るための調査で、第1週目の講義終了後に配布し、翌週提出とした。第2回目と第3回目はほぼ同様の設問であるが、カリキュラムの初期段階と終了後との変化を見るために、それぞれカリキュラム第2週目の講義終了後配布・翌週提出と、全カリキュラム終了後の期末試験日に回答・回収とした。したがって、調査時期は1998年4月第3週、第4週と、7月2日である。

C 集計方法

回収されたアンケートのデータ入力および集計にはデータベースソフト“ファイル・

メーカー”を使用した。

V 調査結果

A 回答状況

6クラス計196名のうち、3回分全てのアンケートを提出した学生のみ分析の対象とした。したがって有効回答数は186、有効回答率は94.9%となった。

B 調査対象者 ※表1、2

有効回答とした186名の出身高校の地域は大阪市内を含む大阪府内が87名(46.7%)、その他の都道府県が84名(45.2%)と、ほぼ同数である。高校の種類は、都道府県立が111名で59.7%を占め、市町村立18名(9.7%)、私立42名(22.6%)である。

1 情報機器操作経験について ※表3、4

授業やクラブ活動でのコンピュータ経験についての質問し、複数回答で選んでもらった。うち、66名(35.5%)が「経験なし」と回答した。経験した内容は多い順に、「コンピュータの基本操作」107名(57.5%)、「ワープロソフトの利用法」28名(15.1%)、「図形ソフトの利用法」20名(10.8%)、「表計算ソフトの利用法」18名(9.7%)となっている。授業やクラブ活動以外での電子機器操作経験については「ファミコン・ゲームボーイ」が144名(77.4%)と圧倒的に多く、「ワープロ」が101名(54.3%)とそれに続く。

2 日頃の情報収集について ※表5、6

背景として、日頃の情報収集について質問し、複数回答で選んでもらった。「友人、知人に尋ねる」を選んだ学生が159名(85.5%)と最も多く、「家族」「教師」を合わせて身近な人が日頃の情報収集相手となっている様子がうかがえる。「書店で本を探す」と「図書館で本を探す」を合わせても83名(44.6%)と少なく、学生が本というメディアを情報収集手段として活用しているとはいえない。日頃役立つと感じているメディアを上位3位まで選んでもらった。この質問では159名(85.5%)もの学生が「テレビ・ラジオ」を選んでいる。印刷媒体では「新聞」127名(68.3%)、「雑誌」111名(59.7%)で、「図書」29名(15.6%)に比べると格段に多いが、これは新しい情報を提供してくれるメディアこそ役立つものであると認識されているからだと考えられる。情報機器系を選んだ学生は、「インターネット」19名(10.2%)、「パソコン通信」4名(2.2%)で、これらは、入学時の多くの学生にとっては未活用のメディアであることがわかる。

3 図書館利用について ※表7、8、9

高校生活までにおいて利用したことのあるある図書館を尋ね、複数回答で選んでもらった。多数の学生が学校図書館を利用したと答え、中でも「高校の図書館」は145名で78%の学生が利用していたことになる。「地域の市町村立図書館」の利用も148名(79.6%)と

多い。「大学図書館」と答えた学生が10名(5.4%)あったが、出身が短大また大学が併設されている高校の学生と思われる。「利用したことがない」と答えた学生も5名(2.7%)いた。

利用目的を学校図書館と公共図書館とに分けて質問し、それぞれ複数回答で選んでもらった。この館種の異なる図書館についての回答傾向は似かよったものになった。いずれも「図書を借りる」とほぼ同じ割合で「自習」と答えた学生がいた。資料の探し方も学校図書館と公共図書館とに分けて尋ねた。学校図書館ではコンピュータ目録を採用してるところが少ないため、「直接書架で探す」と「カード目録で探す」を選んだ学生が公共図書館における割合よりも当然高い。公共図書館では「コンピュータ目録で探す」と答えた学生が81名(43.5%)で、約半数の学生が高校時代までに公共図書館のOPACを経験していることになる。「図書館員に尋ねる」と答えた学生はいずれの図書館でも35%近くに達する。 ※表10、11

図書館利用方法を学校で教わった経験の有無については、「詳しく教わった」「簡単に教わった」「教わったような気がする」を合わせると125名で、約67%の学生が高校生活までに何らかのかたちで図書館利用指導を受けていることになる。どこで教わったかという質問には、「高校」と答えた学生が73名(39.2%)、「小学校」50名(26.9%)、「中学校」38名(20.4%)、であった。 ※表12

最後に図書館のサービスで知っていることを尋ね、複数回答で選んでもらった。「貸出サービス」については162名(87.0%)と、ほとんどの学生が知っていると答えた。「館内閲覧」「複写サービス」を知っていると答えた学生はそれぞれ133名(71.5%)、115名(61.8%)と多い。知っている学生が少なかったのは「アウトリーチ」「レフェラルサービス」「多文化サービス」で、それぞれ7名(3.8%)、9名(4.8%)、10名(5.4%)である。前の質問で、公共図書館を利用したことがあると答えた学生が80%近くもいる割には、これらのサービスの存在が広がっていないということがうかがえる。「情報検索サービス」を知っていると答えた学生が116名(62.4%)もいたが、これは商用データベース等の代行検索という認識ではなかった可能性がある。「OPAC」を知っていると答えた学生が35名(18.8%)と意外に少ないがこれは実際は知っている学生がOPACという名称を知らないため、「情報検索サービス」にあたりと判断してしまったと考えられる。

VI 調査結果の分析と考察

A コンピュータ・リテラシー ※表13、14

1 高校生活までの情報機器経験の影響

授業開始の翌週に実施した第2回アンケートの質問「大阪女学院図書館のOPACを使ってみてどう感じましたか」を、第1回アンケートで「入学前に情報機器操作経験なし」と回答した66名と、「基本操作経験あり」と回答した107名の別に比較してみた。「わかりやすい」「便利」のべ回答数はそれぞれなし40名(利用した学生の76.9%)、あり74名(利用した学生の94.9%)で、小学校や中学校、高校の授業またはクラブ活動でコンピュータ

の基本操作を経験している学生の方が肯定的な回答をしている数が多い。一方、「カード目録の方が使いやすい」「わかりにくい」「コンピュータを使うことが不安」「コンピュータが嫌い」「あまり役に立たない」という否定的な回答の合計はなし34名(51.5%)、あり28名(26.2%)で、入学までに情報機器操作経験のある学生の方がコンピュータへの抵抗が少ないことがわかる。

同様の比較を授業修了時に実施した第3回アンケートでも行った。「経験なし」と「経験あり」と回答した学生別の肯定的回答は、それぞれ、なし87名、あり128名である。一方、否定的回答は、それぞれ、11名(16.7%)、21名(19.6%)となり、第2回アンケートのような顕著な違いが見られない。これは3カ月という短い期間ではあるが“研究調査法”を受講する間に期間に、過去の機器操作経験有無の影響がほとんど及ばなくなったと言える。 ※表15、16

さらに第2回アンケートの質問「CD-ROMを利用してみてどう感じましたか」を、第1回アンケートで「入学前に情報機器操作経験なし」と回答した66名と、「基本操作経験あり」と回答した107名の別に比較してみた。「わかりやすい」「便利」のべ回答数はなし5名(利用した学生の27.8%)、あり16名(利用した学生の57.1%)で、OPACの場合と同様、小学校や中学校、高校の授業またはクラブ活動でコンピュータの基本操作を経験している学生の方が肯定的な回答をしている数が多い。一方、「書誌・索引誌の方が使いやすい」「わかりにくい」「コンピュータを使うことが不安」「コンピュータが嫌い」「あまり役に立たない」という否定的な回答の合計はなし12名(18.2%)、あり15名(14.0%)で、入学までに情報機器操作経験のある学生の方がやや少なくなっている。

同様の比較を授業修了時に実施した第3回アンケートでも行った。「経験なし」と「経験あり」と回答した学生別の肯定的回答は、それぞれ、なし52名(78.8%)、あり89名(83.2%)である。一方、否定的回答は、それぞれなし36名(54.5%)、あり42名(39.3%)となり、OPACの場合よりも過去の情報機器操作経験有無の影響が及んでいると言える。これは、CD-ROMによって検索や操作方法が異なり、複数のCD-ROM同時に使いこなすのは困難であったためと考えられる。

2 カリキュラムによる変化(第2回と第3回アンケート結果の比較)

a 女学院 OPAC の利用方法：使った検索項目及び検索式 ※表17

女学院 OPAC の利用方法について、使った検索項目及び検索式について質問し、複数回答で選んでもらった。検索項目は第2回、第3回ともタイトルが最も多く、それぞれ107名(57.5%)、138名(74.2%)である。女学院 OPAC ではタイトル部分一致検索が可能である。学生はこの機能を活用して、タイトル検索を主題検索として使っていることがうかがえる。変化が大きいのは件名で、第2回アンケートの19名(10.2%)から第3回アンケートの64名(34.3%)へと増加している。前述の分析により約半数が高校時代までに公共図書館の OPAC を経験していることがわかったが、授業で導入するまで、検索項目として件名を利用したことがない学生が多かった。複合検索式については、利用がのべ12

名（6.5%）から140名（75.3%）へと著しく増加している。これは自然語、統制語の違いや部分一致検索等の機能を習得し、各自が課題に取り組んだ効果であると言える。

b 女学院 OPAC を利用した感想 ※表18

女学院 OPAC を利用した感想を複数回答で選んでもらい、第2回、第3回アンケート結果で比較した。女学院 OPAC が「わかりやすい」「便利」と答えた学生が2回121名から3回215名へと増えている。「カード目録の方が使いやすい」「わかりにくい」「あまり役に立たない」の合計は2回23名から3回21名とあまり変化がない。「コンピュータを使うことが不安」「コンピュータが嫌い」という心理的に否定的な回答をした学生は2回38名（20.4%）から3回11名（5.9%）とかなり減少している。これによって、授業及び課題に取り組むことが情報機器操作に対するプレッシャーを取り除く効果を導いたと考えられる。

c CD-ROM を利用した感想 ※表19

CD-ROM を利用した感想を複数回答で選んでもらい、第2回、第3回アンケート結果で比較した。「わかりやすい」「便利」と答えた学生が2回19名（利用した学生の34.5%）から3回140名（利用した学生の76%）へと増加している。「冊子体の書誌・索引誌の方が使いやすい」「わかりにくい」「あまり役に立たない」の合計は2回12名（利用した学生の21.3%）から3回49名（利用した学生の26.6%）とあまり変化がない。「コンピュータが嫌い」「コンピュータを使うことが不安」という心理的に否定的な回答をした学生は2回11名（5.9%）から3回30名（16.1%）と増加している。これは約半数が入学前に経験している OPAC の場合と違って、過去に CD-ROM を利用した経験がない上、短期間に複数の CD-ROM を習得する必要があるためと考えられる。

B 図書館利用について

1 高校図書館と女学院図書館における変化

a 図書館での資料の探し方 ※表20

第2回アンケートで高校図書館での資料の探し方を質問し、第3回アンケートで女学院図書館での資料の探し方について同じ質問をし、それぞれ複数回答で選んでもらった。

高校図書館で「OPAC を使う」と答えた学生は10名（探した学生の6.8%）であるのに対し、女学院図書館では162名（探した学生の87.6%）である。これはコンピュータ環境の違い上、当然の結果である。「直接書架で探す」と答えた学生は高校図書館24名（探した学生の16.4%）、女学院図書館69名（探した学生の37.3%）と増加している。逆に「図書館員に尋ねる」と答えた学生は高校図書館52名（探した学生の35.6%）、女学院図書館36名（探した学生の19.5%）と減少している。これは繰り返し図書館を利用するにつれて女学院図書館の OPAC 活用が可能になったことと、書架配列にも慣れてきた影響があると考えられる。3回目の調査で「書誌・索引誌を使う」「CD-ROM 版書誌・索引誌を使

う」は女学院図書館でそれぞれ31名（探した学生の16.6%）、73名（探した学生の39.5%）と増加し、これは課題を通して組織的に資料を収集することに取り組んだ結果であることが明らかである。「友達に聞く」「先生に聞く」を合わせた回答は女学院図書館で25名（探した学生の13.5%）であるのに対し、高校図書館で54名（探した学生の37%）であった。これは1回目アンケートの日頃の情報収集についての質問で、「知人、友人に尋ねる」「教師に尋ねる」が多かったことにも関連があると考えられる。

b 図書館を利用した感想 ※表21

第2回アンケートで高校図書館を利用した感想を尋ね、第3回アンケートで女学院図書館を利用した感想を同一選択肢で尋ね、それぞれ複数回答で選んでもらった。

「とても役に立つ」と答えた学生は高校図書館で57名（30.6%）、女学院図書館で140名（75.3%）、また「新しい情報との出会いがある」と答えた学生は高校図書館で28名（15.1%）、女学院図書館で61名（32.8%）と図書館利用の満足度は授業を受けたことにより倍増している。「資料が探しやすい」と答えた学生も15名（8.1%）から83名（44.6%）と増加し、授業の成果が表れている。「図書館をもっと使いこなしたい」と答えた学生は高校図書館でも53名（28.5%）いたが、女学院図書館では81名（43.5%）とさらに前向きな学生が増えている。一方、女学院図書館で「うまく資料が探せなかった」と答えた学生が20名（10.6%）いることや、「図書館員の手を煩わせるのが悪い」と答えた学生が17名（9.1%）であることは、図書館利用を促す立場として工夫の余地があると反省させられる点だ。

c 図書館員にどんな質問をしたか ※表22

第2回アンケートで高校図書館で図書館員にどんな質問をしたかを尋ね、第3回アンケートで女学院図書館で図書館員にした質問について尋ね、それぞれ複数回答で選んでもらった結果を比較した。

高校図書館と女学院図書館を比較すると、「図書館の利用について」は23名（質問した学生の23.5%）から21名（質問した学生の16.8%）、「資料の所在」は49名（質問した学生の50%）から40名（質問した学生の32%）といずれも多少減少している。逆に「資料の探し方」は14名（質問した学生の14.3%）から21名（質問した学生の16.8%）と僅かながら増加している。「資料所蔵の有無」は22名（質問した学生の22.4%）と27名（質問した学生の21.6%）ではほぼ同率であった。「OPACの検索方法」「CD-ROMの使い方」の増加についてはコンピュータ機器環境の変化に伴う当然の結果である。女学院図書館で「CD-ROMの使い方」を質問した学生が49名（質問した学生の39.2%）もいた。授業中の習得度が不十分であったわけで、授業形式に改善の余地がある。「質問しなかった」と答えた学生はいずれの図書館でも88名（47.3%）、61名（32.8%）存在した。

2 図書館の機能で初めて知ったこと ※表23

図書館の機能で初めて知ったことについて第2回、第3回アンケートで同じ選択肢を設け、それぞれ複数回答で選んでもらった結果を比較した。

いずれのアンケートでも「OPACで資料が探せる」「CD-ROMが利用できる」の回答数が圧倒的に多かった。「貸出サービス」や「館内閲覧」は図書館の機能として周知されているようだが、第2回アンケート、つまり短大に入学した時点で「資料貸出の予約ができる」「資料購入のリクエストができる」を選択した学生が予想以上に多く、それぞれ57名(30.6%)、45名(24.2%)であった。これによって、高校までの図書館利用において、十分な図書館サービスを経験していないといえるのではないか。「図書館員が資料の探し方を教えてくれる」「図書館員に質問してもいい」の回答数はいずれのアンケートでも少なく、サポートしてもらえる対象として図書館員を認識はしているようである。

Ⅶ まとめ

先述のように、今回の調査の対象となった“研究調査法”の受講生は、高等学校教育までに情報機器操作教育を必ずしも受けていない。この経験の有無のばらつきを情報機器操作の習熟度の差と見た場合、それが電子情報源の習得に与える影響や“研究調査法”受講後まで電子情報源の利用に影響するのかを調査したが、興味深い結果が得られた。また、“研究調査法”を受講することによって学生の図書館利用に何らかの肯定的・積極的要素を加え得るのかということも、同設問のアンケートの実施を授業の初期と終了後という時間差をつけることによって、より鮮明な形で得られた。

高等学校教育までの情報機器操作経験の有無が電子情報源に与える影響を見てみると、経験のある者はカリキュラム初期の段階で電子情報源を利用してみて「わかりやすい」、「便利」と電子情報源に対して肯定的であるのに対して、経験のない者は「わかりにくい」、「コンピュータを使うことが不安」など、否定的であることがわかった。しかし、カリキュラムの終了後に同じ質問をしてみると、経験のある者とない者との差はほとんどなくなった。したがって、“研究調査法”の受講を通して電子情報源に触れる機会が多く与えられ、受講以前の情報機器操作経験の有無という格差がなくなっていったと見てよい。

“研究調査法”と図書館利用との関係は、技術的な側面と心理的な側面との両方からみることができる。技術的には、図書館での資料の探し方として、高等学校までは「図書館員に尋ねる」、「友達に聞く」など、人的な方法で探していた者が多かったが、授業終了時には「OPACを使う」や「CD-ROM版書誌・索引誌を使う」、「書誌・索引誌を使う」など、いわゆる二次資料を使って探索するように変化したことがわかった。また、図書館に対する態度もカリキュラム終了時には「とても役に立つ」、「資料が探しやすい」、「図書館をもっと使いこなしたい」と積極的なものに変化した割合が大きかった。したがって、“研究調査法”の受講が技術的には組織的な情報探索方法の習得を促し、心理的には情報活動に対する積極性を養っていると言える。

その他興味深かった点は、CD-ROMの場合にOPACよりも過去の情報機器操作経験の有無の影響が顕著なことである。これは、情報機器操作に慣れている学生のほうが操作方

法の異なる複数の CD-ROM の習得に有利なためと考えられる。従って、CD-ROM の教授に際しては、演習により重点を置くことが重要と思われる。もうひとつの点は、OPAC 利用の際、自然語・統制語の使い分け、部分一致検索や複合検索式の利用が“研究調査法”の受講初期と受講後との比較で顕著な増加を示していることである。このことは、電子情報環境下では、電子情報源に特有な機能を徹底して習得させることが、効率的な情報検索の成功の鍵となることを示している。

最後に、今後の課題として次のような点があげられる。第一は、情報機器操作経験と電子情報源との関係についてのより詳細な調査の必要性である。今回の調査で、学生は高等学校までに原理や理論よりも操作に重点を置いた情報教育を受けてきていることがわかったが、原理や理論を教えない教育がなされた場合に情報機器を使いこなすにあたって応用のききにくい状況が作り出されるのかが疑問である。また、どのような内容の情報教育を受講してきた学生の電子情報源の習熟度が高くなるのかの調査も、必要であると思われる。

第二に、利用教育カリキュラムの一部の調査だけではなく、情報の収集・評価・提供という一つの流れとしてカリキュラム全体をとらえた場合の総合的な調査の必要性である。今回の調査でわかったのは、カリキュラム初期と終了時という時間の経過、つまり学生が情報機器操作経験を積み積むほど情報機器への抵抗感や不安感は解消されるようだということである。しかし、情報の収集・評価・提供のプロセスでは、単に情報検索システムとしての電子情報源や図書館の操作や使用といった物理的な面だけではなく、情報ニーズの発生から情報の提供までの全プロセスにわたって心理的な面も大きく影響をあたえていることが、Jakobovits and Nahl-Jakobovits や Kuhlthau の研究⁽¹⁵⁾でも報告されている。したがって、日本において“研究調査法”あるいは BI の研究を行う場合、学生の情報ニーズ（小論文の作成など）の発生から情報の提供までの全課程にわたる物心両面からの総合的な調査が、より効果的な利用教育を開発していくためにも必要であると思われる。

VIII 謝辞

この調査に協力して下さった学生の皆さんと、“ファイル・メーカー”ソフトの利用について細かくご指導下さった CALL 準備室の長江安佐子さん、資料を提供して下さい下さった図書館の坂本恭子さん、そして全ての調査プロセスを通して貴重な御助言と激励を下さった丸本郁子教授に、この場をもって御礼申し上げる次第である。

注

- (1) 関西地区の公共図書館員の利用指導に対する意識調査は、丸本郁子によって“公共図書館員の利用指導についての意識調査：関西地区において：中間報告”大阪女学院短期大学紀要23 (1992)：79-108. にまとめられている。
- (2) 大学や短期大学図書館における利用者教育に関する調査には次のようなものがある。日本図書館協会図書館調査委員会“利用指導の実状：4年制大学：日本の図書館付帯調査概要報告”現代の図書館26, 2 (1988)：116-120. 安達勉“利用指導の実状：短期大学・高等専門学校：日本の図書館付帯調査概要報告”現代の図書館32, 1 (1994)：70-75. 大城善盛・生嶋圭子・村上泰子“大規模大学図書館における利用者教育の実態：平成5年度調査”図書館学会年

- 報40, 4 (1994): 133-144. 村上泰子・大城善盛・生嶋圭子 “中規模大学図書館における利用者教育の実態：平成6年度調査” 図書館学会年報41, 3/4 (1995): 145-156.
- (3) Eadie, Tom. “Immodest Proposals : User Instruction for Students Does Not Work.” *Library Journal* 115 (October 15, 1990): 42-45. Eadie は利用指導全般の有効性を完全に否定するものではないが、現状のままの BI では従来のレファレンス・サービスの中に BI の機能を組み込んだ方がよいとする立場をとっている。重要なのは、「利用者教育の問題点は質問が持ち上がる前に答えが提供されてしまうこと」(45) という指摘である。しかし、本稿で扱っている“研究調査法”のように、小論文を課すことを通じて情報の収集・評価・提供を指導すれば、小論文という課題が学生の情報要求になるので、上記の問題は解消される。尚、Eadie の記事に対する読者の反応は非常に大きく、*Library Journal* 116 (January 1991): 8, 10. に掲載された手紙を参照すると興味深い。
- (4) Hopkins, Frances L. “A Century of Bibliographic Instruction : The Historical Claim to Professional and Academic Legitimacy.” *College & Research Libraries* 43, 3 (1982): 192-198. は一例である。
- (5) 不確定性の原理そのものについては Kuhlthau, C. C. “An Uncertainty Principle for Information Seeking : A Qualitative Approach.” *Encyclopedia of Library and Information Science*. V. 61. Ed. Allen Kent. New York : Marcel Dekker, 1998. の355-369頁に詳しい。その他 Kuhlthau による研究には“Inside the Search Process : Information Seeking from the User's Perspective.” *Journal of the American Society for Information Science* 42, 6 (1991): 361-371. など多数ある。
- (6) 福永智子 “学校図書館における新しい利用者教育の方法：米国の学校図書館における利用者教育の理論化：Carol C. Kuhlthau を中心に”『論集・図書館学研究の歩み』第14集日本図書館学会研究委員会編東京日外アソシエーツ1994.
- (7) Kent, Allen, ed. *Encyclopedia of Library and Information Science*. V. 61 New York : Marcel Dekker, 1998. の294-310頁には Mark A. Horney による”Teaching Critical Thinking and Problem Solving.”がまとめられており、Oberman, Cerise. “Avoiding the Cereal Syndrome, or Critical Thinking in the Electronic Environment.” *Library Trends* 39 (Winter 1991): 189-202. にも見られるように電子情報環境では批判的思考がますます重要視されている。
- (8) 平久江祐司 “学校図書館利用教育における批判的思考の育成：情報の評価スキルとしての役割” 図書館学会年報42 (1996): 181-198.
- (9) “自立”の概念については、JLA 図書館利用教育委員会 “情報教育を図書館サービスのもうひとつの柱に！：図書館利用教育ガイドライン（第二次案）まとまる” 図書館雑誌89, 10 (1995): 837-843. の後注や、丸本郁子 “利用教育の新しい動き” 短期大学図書館研究16 (1996): 1-10. に詳しい。
- (10) 日本図書館協会利用教育委員会『図書館利用教育ガイドライン：大学版』東京日本図書館協会1998。
- (11) 菅原春雄 “利用教育を実施してみても：文献検索法” 短期大学図書館研究16 (1996): 31-39.
- (12) 高木美佳 “図書館情報学分野における情報教育の現状と問題点：愛知淑徳大学におけるアンケート調査を基礎として” 第45回日本図書館学会研究大会発表要綱 (1997): 29-32.
- (13) 日本図書館協会利用教育委員会『図書館の達人：レポート・論文のまとめ方』Part II 第6巻東京日本図書館協会1993 VHS 28分。
- (14) 図書館の概要や活動については『1996年度大阪女学院図書館報告（1996年4月～1997年3月）』大阪大阪女学院図書館1997。や坂本恭子 “授業に結びついた利用教育” 短期大学図書館研究16 (1996): 53-63. に詳しい。

- (15) Jakobovits, Leon A., and Diane Nahl-Jakobovits. "Measuring Information Searching Competence." *College & Research Libraries* 51 (September 1990): 448-462. Carol C. Kuhlthau の著作については注5を参照のこと。

引用文献

安達勉 “利用指導の実状：短期大学・専門学校：日本の図書館付帯調査概要報告” 現代の図書館32, 1 (1994)：70-75.

廣田とし子・上田修一 “大学図書館における電子情報源の利用者教育調査” *Library and Information Science* 33 (1995)：83-98.

JLA 図書館利用教育委員会 “情報教育を図書館サービスのもうひとつの柱に！：図書館利用教育ガイドライン（第二次案）まとまる” 図書館雑誌89, 10 (1995)：837-843.

日外アソシエーツ『大学におけるデータベース利用教育システムに関する調査研究』東京 日外アソシエーツ 1992。

日本図書館協会図書館調査委員会 “利用指導の実状：4年制大学：日本の図書館付帯調査概要報告” 現代の図書館26, 2 (1988)：116-120.

大阪女学院短期大学『学生要覧1998年度』[大阪大阪女学院短期大学1998]。

資料1：調査統計図表

表1 出身高校の地域

地 域	人数	%
大阪市内	30	16.1
大阪市内のその他の市町村	57	30.6
その他の都道府県	84	45.2
無記入	15	8.1
合 計	186	100

表2 出身高校の種類

種 類	人数	%
都道府県立	111	59.7
市町村立	18	9.7
私立	42	22.6
その他	1	0.5
無記入	14	7.5
合 計	186	100

表3 授業やクラブ活動でのコンピュータ経験
(複数回答)

項 目	件数	%
コンピュータの基本操作	107	57.5
ワープロソフトの利用法	28	15.1
プログラム言語について	4	2.2
表計算ソフトの利用法	18	9.7
図形ソフトの利用法	20	10.8
データベースの利用法	8	4.3
OSについて	1	0.5
コンピュータの原理	5	2.7
ネットワークについて	5	2.7
その他	7	3.8
経験なし	66	35.5

表4 授業以外での電子機器操作経験
(複数回答)

項 目	件数	%
コンピュータ	53	28.5
ワープロ	101	54.3
ファミコン、ゲームボーイ	144	77.4
その他	3	1.6
使ったことがない	14	7.5

表5 日頃の情報収集

項 目	件数	%
友人、知人に尋ねる	159	85.5
家族に尋ねる	107	57.5
教師に尋ねる	90	48.4
書店で本を探す	35	18.8
図書館で本を探す	48	25.8
図書館で図書館員に質問する	8	4.3
その他	1	0.5

表6 日頃、役立つと感じているメディア
(複数回答)

項 目	件数	%
テレビ・ラジオ	107	57.5
新聞	28	15.1
雑誌	4	2.2
図書	18	9.7
パソコン通信	20	10.8
インターネット	8	4.3
口コミ	1	0.5
その他	5	2.7

表7 利用したことのある図書館

(複数回答)

図書館の種類	件数	%
小学校の図書館	116	62.4
中学校の図書館	99	53.2
高校の図書館	145	78.0
地域の市町村立図書館	148	79.6
都道府県立図書館	30	16.1
大学図書館	10	5.4
国立国会図書館	1	0.5
専門図書館	0	0
利用したことがない	5	2.7

表8 図書館を利用した目的

(複数回答)

目的	学校図書館 (件) (%)		公共図書館 (件) (%)	
	件	%	件	%
図書を借りる	131	70.4	126	67.7
レファレンス・ブックの利用	34	18.3	26	14.0
新聞・雑誌の利用	30	16.1	32	17.2
視聴覚施設の利用	5	2.7	16	8.6
コピー機の利用	14	7.5	12	6.5
自習	132	71.0	109	58.6
ひまつぶし	48	25.8	23	12.4
その他	7	3.8	3	1.6

表9 図書館での資料の探し方

(複数回答)

	学校図書館 (件) (%)		公共図書館 (件) (%)	
	件	%	件	%
直接書架で探す	105	56.5	81	43.5
コンピュータ目録で検索する	18	9.7	81	43.5
カード目録で探す	41	22.0	19	10.2
図書館員に尋ねる	61	32.8	64	34.4
書誌・索引誌を使う	12	6.5	10	5.4
その他	1	0.5	3	1.6

表10 図書館利用方法を学校で教わった経験

項目	人数	%
詳しく教わった	21	11.3
簡単に教わった	58	31.2
教わったような気がする	46	24.7
教わらない	45	24.2
無記入	16	8.6
合計	186	100

表11 どこで教わったか

	人数	%
小学校	50	26.9
中学校	38	20.4
高校	73	39.2

表12 図書館のサービスで知っていること
(複数回答)

項 目	件数	%
貸出サービス	162	87.0
館内閲覧	133	71.5
情報検索サービス	116	62.4
複写サービス	115	61.8
CD-ROM	74	39.8
ILL	69	37.1
読み聞かせ・お話し会	65	34.9
インターネット	64	34.4
レファレンスサービス	58	31.2
図書館利用教育	36	19.4
OPAC	35	18.8
障害者サービス	32	17.2
多文化サービス	10	5.4
レフェラルサービス	9	4.8
アウトリーチ	7	3.8

表13 OPACを使った感想（授業開始の翌週）
(複数回答)

項 目	操作経験なし (66名)		操作経験あり (107名)	
	(件)	(%)	(件)	(%)
わかりやすい	18	34.6	36	46.2
便利	22	42.3	38	48.7
カード目録の方が使いやすい	1	1.5	1	0.9
わかりにくい	14	21.2	9	8.4
コンピュータを使うことが不安	17	25.8	17	15.9
コンピュータが嫌い	2	3.0	1	0.9
あまり役に立たない	0	0	0	0
その他	2	3.0	1	0.9
利用しなかった	14	21.2	29	27.1

* 「わかりやすい」「便利」については利用した学生に占める割合を示した

表14 OPACを使った感想(授業終了時) (複数回答)

項 目	操作経験なし (66名)		操作経験あり (107名)	
	(件)	(%)	(件)	(%)
わかりやすい	46	69.7	71	66.3
便利	41	32.1	57	53.3
カード目録の方が使いやすい	2	3.0	1	0.9
わかりにくい	3	4.6	9	8.4
コンピュータを使うことが不安	3	4.6	5	4.7
コンピュータが嫌い	2	3.0	3	2.8
あまり役に立たない	1	1.5	3	2.8
その他	2	3.0	1	0.9
利用しなかった	0	0	1	0.9

表15 CD-ROMを使った感想(授業開始の翌週) (複数回答)

項 目	操作経験なし (66名)		操作経験あり (107名)	
	(件)	(%)	(件)	(%)
わかりやすい	1	5.6	10	35.7
便利	4	22.2	6	21.4
書誌・索引誌の方が使いやすい	0	0	0	0
わかりにくい	5	7.6	9	8.4
コンピュータを使うことが不安	5	7.6	4	3.7
コンピュータが嫌い	2	3.0	1	0.9
あまり役に立たない	0	0	1	0.9
その他	0	0	1	0.9
利用しなかった	48	72.2	79	73.8

* 「わかりやすい」「便利」については利用した学生に占める割合を示した

表16 CD-ROMを使った感想(授業終了時) (複数回答)

項 目	操作経験なし (66名)		操作経験あり (107名)	
	(件)	(%)	(件)	(%)
わかりやすい	23	34.9	47	43.9
便利	29	43.9	42	39.3
書誌・索引誌の方が使いやすい	5	7.6	3	2.8
わかりにくい	12	18.2	21	19.6
コンピュータを使うことが不安	13	19.7	10	9.3
コンピュータが嫌い	5	7.6	3	2.8
あまり役に立たない	1	1.5	5	4.7
その他	2	3.0	4	3.7
利用しなかった	0	0	1	0.9

表17 OPACの利用：使った検索項目及び検索式
(2週及び終了時調査) (複数回答)

項 目	2回目 (件) (%)		3回目 (件) (%)	
	タイトル	107	57.5	138
著者名	72	38.7	73	39.2
分類番号	28	15.1	42	22.6
件名	19	10.2	64	34.4
出版社	7	3.7	10	5.4
出版年	2	1.1	13	7.0
複合検索 (AND)	11	5.9	95	51.1
複合検索 (OR)	1	0.5	41	22.0
複合検索 (NOT)	0	0	4	2.2

表18 女学院 OPAC を利用した感想
(2週及び終了時調査) (複数回答)

感 想	2回目 (件) (%)		3回目 (件) (%)	
	わかりやすい	57	39.3	117
便利	64	44.1	98	53.3
カード目録の方が使いやすい	2	1.4	4	2.2
わかりにくい	21	14.5	13	7.1
あまり役に立たない	0	0	4	2.2
コンピュータを使うことが不安	35	18.8	7	3.8
コンピュータが嫌い	3	1.6	4	2.2
その他	3	1.6	3	1.6
利用しなかった	41	22.0	2	1.1

* 「わかりやすい」「便利」「カード目録の方が使いやすい」「わかりにくい」「あまり役に立たない」については利用した学生に占める割合を示した

表19 CD-ROMを利用した感想 (2週及び終了時調査)(複数回答)

感 想	2回目		3回目	
	(件)	(%)	(件)	(%)
わかりやすい	11	20.0	69	37.5
便利	8	14.5	71	38.6
冊子体の書誌・索引誌の方が使いやすい	0	0	8	4.3
わかりにくい	11	20.0	35	19.0
あまり役に立たない	1	1.8	6	3.3
コンピュータを使うことが不安	2	1.1	8	4.3
コンピュータが嫌い	9	4.8	22	11.8
その他	1	0.5	4	2.2
利用しなかった	131	70.4	2	1.1

* 「わかりやすい」「便利」「冊子体の書誌・索引誌の方が使いやすい」「わかりにくい」「あまり役に立たない」については利用した学生に占める割合を示した

表20 図書館での資料の探し方 (2週及び終了時調査)(複数回答)

探 し 方	高校の図書館		女学院図書館	
	(件)	(%)	(件)	(%)
OPACを使う	10	6.8	162	87.6
カード目録を使う	28	19.2	16	8.6
直接書架で探す	24	16.4	69	37.3
図書館員に尋ねる	52	35.6	36	19.5
友達に聞く	35	24.0	21	11.4
先生に聞く	19	13.0	4	2.2
書誌・索引誌を使う	2	1.4	31	16.6
CD-ROM版書誌・索引誌を使う	1	0.7	73	39.5
その他	1	0.7	1	0.5
探さなかった	40	21.5	1	0.5

* 「探さなかった」以外の項目は探した学生に占める割合を示した

表21 図書館利用した感想 (2週及び終了時調査)(複数回答)

感 想	高校の図書館 (件) (%)		女学院図書館 (件) (%)	
	とても役に立つ	57	30.6	140
新しい情報との出会いがある	28	15.1	61	32.8
資料が探しやすい	15	8.1	83	44.6
図書館をもっと使いこなしたい	53	28.5	81	43.5
図書館員は信頼がおけ頼りになった	16	8.6	13	7.0
あまり役に立たない	31	16.7	4	2.2
古い資料ばかりだった	24	12.9	9	4.8
資料が探しにくい	30	16.1	5	2.7
うまく資料が探せなかった	32	17.2	20	10.6
図書館員に質問するのがむずかしい	2	1.1	6	3.2
図書館員の手を煩わせるのが悪い	3	1.6	17	9.1
その他	14	7.5	11	5.9

表22 図書館員にどんな質問をしたか(2週及び終了時調査)(複数回答)

質 問 内 容	高校の図書館 (件) (%)		女学院図書館 (件) (%)	
	図書館の利用について	23	23.5	21
資料の所在	49	50.0	40	32.0
資料所蔵の有無	22	22.4	27	21.6
資料の探し方	14	14.3	21	16.8
OPACの検索方法	3	3.1	23	18.4
CD-ROMの使い方	0	0	49	39.2
その他	4	4.1	5	4.0
質問しなかった	88	47.3	61	32.8

* 「質問しなかった」以外の項目は質問した学生に占める割合で示した

表23 図書館の機能で初めて知ったこと (2週及び終了時調査)(複数回答)

探 し 方	女学院入学時		授業終了時	
	(件)	(%)	(件)	(%)
図書館員が資料の探し方を教えてくれる	3	1.6	12	6.5
図書館員に質問してもいい	5	2.7	2	1.1
複写サービス	44	23.7	26	14.0
ILL	86	46.2	51	24.4
OPACで資料が探せる	122	65.6	101	54.3
図書館オリエンテーション	65	34.9	27	14.5
CD-ROMが利用できる	113	60.8	131	70.4
貸出サービス	2	1.1	4	2.2
館内閲覧	18	9.7	6	3.2
ビデオ等が視聴できる	85	45.7	66	35.5
いろんなテーマのパス・ファインダーがある	48	25.8	20	10.8
資料貸出の予約ができる	57	30.6	45	24.2
資料購入のリクエストができる	45	24.2	47	25.3
初めて知ったことは何もない	138	74.2	109	58.6

図書館利用等に関するアンケート

研究調査法の講義をすすめるにあたり、みなさんの日頃の情報収集や図書館活用についてお尋ねし、参考にさせていただきたいと考えています。ご協力お願いいたします。なお、ご記入いただいた内容は研究調査以外の目的に使用することはありません。

- *学籍番号を必ずご記入ください。
- *該当する番号に○をつけてください。
- *次回の講義でご提出ください。

I はじめに

問1 出身高校の地域をおしえてください。

1. 大阪市内
2. 大阪府内のその他の市町村(市町村名:)
3. その他の都道府県(都道府県名:)

問2 出身高校の種類をおしえてください。

1. 国立
2. 都道府県立
3. 市町村立
4. 私立
5. 高校卒業資格取得
6. その他()

II 情報機器操作経験について

問3 小・中・高校の授業またはクラブ活動で経験した内容をおしえてください。(複数回答可)

1. 経験なし
2. コンピュータの歴史
3. コンピュータの基本操作
4. OSについて
5. コンピュータの原理
6. ワードプロソフトの利用法
7. プログラム言語について
8. 表計算ソフトの利用法
9. 図形ソフトの利用法
10. ネットワークについて
11. データベースの利用法
12. その他()

問4 授業以外で使ったことのある情報機器をおしえてください。(複数回答可)

1. 使ったことがない
2. ワードプロ
3. コンピュータ
4. ファミコン、ゲームボーイ
5. その他()

問5 問4でコンピュータを使ったことがあると答えた人にお尋ねします。

- 何のためにコンピュータを使っていましたか。(複数回答可)
1. ワードプロ
 2. 表計算
 3. 図形作成
 4. データベース構築
 5. パソコン通信
 6. インターネット
 7. その他()

III 日常生活の情報収集について

問6 日頃、わからないことを調べる必要が生じた時、主にどのようにしていますか。(複数回答可)

1. 友人、知人に尋ねる
2. 教師に尋ねる
3. 家族に尋ねる
4. 書店で本を探す
5. 図書館で本を探す
6. 図書館で図書館員に質問する
7. その他()

問7 日頃、役に立つと感じているメディアは何ですか。3つまで選んでください。

1. テレビ・ラジオ
 2. 新聞
 3. 雑誌
 4. 図書
 5. パソコン通信
 6. インターネット
 7. 口コミ
 8. その他()
- そのメディアで、主にどのような情報を得ていますか。

問8 これまで新聞記事を教材に使ったり、参考に使った授業を受けたことがありますか。いつ どの授業で()
どのように()

1. 小学校
2. 中学校
3. 高校

IV 図書館利用について

問9 これまでどんな種類の図書館を利用したことがありますか。(複数回答可)

1. 利用したことがない
2. 小学校の図書館
3. 中学校の図書館
4. 高校の図書館
5. 大学図書館
6. 地域の市町村立図書館
7. 都道府県立図書館
8. 国立国会図書館
9. 専門図書館()

問10 図書館を利用したことがないと答えた人にお尋ねします。なぜ利用しなかった、あるいは利用しないのでしょうか。(複数回答可)

1. 近くに図書館がない
2. 必要性を感じない
3. 読みたい本がない
4. 忙しい
5. 図書館が古い
6. 図書館員が不親切
7. その他()

学籍番号

学籍番号	
------	--

問11 問1で図書館を利用したことがあると答えた人にお尋ねします。どんな目的で利用していましたか。(①②③それぞれ複数回答可)

- ①学校図書館 1. 図書を借りる 2. レファレンスブック(辞書・事典等)の利用
3. 自習(受験勉強等) 4. 新聞・雑誌の利用 5. 視聴覚施設の利用
6. コピー機の利用 7. ひまつぶし 8. その他()
- ②公共図書館 1. 図書を借りる 2. レファレンスブック(辞書・事典等)の利用
3. 自習(受験勉強等) 4. 新聞・雑誌の利用 5. 視聴覚施設の利用
6. コピー機の利用 7. ひまつぶし 8. その他()

問12 あなたが利用したことのある図書館ではコンピュータで資料が探せましたか。

- ①学校図書館 1. はい 2. いいえ 3. 利用したことがない
- ②公共図書館 1. はい 2. いいえ 3. 利用したことがない
- ③その他() 1. はい 2. いいえ 3. 利用したことがない

問13 図書館で資料はどのようにして探していましたか。(①②③それぞれ複数回答可)

- ①学校図書館 1. コンピュータ目録で検索する 2. 図書館員に尋ねる
3. カード目録で探す 4. 書誌・索引誌を使う 5. 直接書架で探す
6. その他()
- ②公共図書館 1. コンピュータ目録で検索する 2. 図書館員に尋ねる
3. カード目録で探す 4. 書誌・索引誌を使う 5. 直接書架で探す
6. その他()
- ③その他 1. コンピュータ目録で検索する 2. 図書館員に尋ねる
3. カード目録で探す 4. 書誌・索引誌を使う 5. 直接書架で探す
6. その他()

問14 あなたは図書館の利用方法を学校で教わりましたか。

1. 教わらない 2. 詳しく教わった 3. 簡単に教わった 4. 教わったような気がする

問15 前問で2、3、4のどれかに丸を付けた方。それはどこで教わりましたか。

1. 小学校 2. 中学校 3. 高校

問16 これまで、様々な授業で学校の先生に図書館の利用をすすめられたことがありますか。どのような図書館を()どの授業で()

問17 図書館では次のサービスをおこなっています。A. そのことを知っていましたか。

B. そのサービスを利用したことがありますか。それぞれについてお答えください。

1. 館内閲覧 (知っている 1 Yes 2 No) (利用 1 有 2 無)
2. レファレンスサービス (知っている 1 Yes 2 No) (利用 1 有 2 無)
3. 貸出サービス (知っている 1 Yes 2 No) (利用 1 有 2 無)
4. 複写サービス (知っている 1 Yes 2 No) (利用 1 有 2 無)
5. レフェラルサービス (知っている 1 Yes 2 No) (利用 1 有 2 無)
6. ILL (知っている 1 Yes 2 No) (利用 1 有 2 無)
(図書館間相互貸借)
7. 図書館利用教育 (知っている 1 Yes 2 No) (利用 1 有 2 無)
8. CD-ROM (知っている 1 Yes 2 No) (利用 1 有 2 無)
9. OPAC (知っている 1 Yes 2 No) (利用 1 有 2 無)
(利用者用オンライン目録)
10. 情報検索(機械検索)サービス (知っている 1 Yes 2 No) (利用 1 有 2 無)
11. インターネット (知っている 1 Yes 2 No) (利用 1 有 2 無)
12. アウトリーチ (知っている 1 Yes 2 No) (利用 1 有 2 無)
13. 多文化サービス (知っている 1 Yes 2 No) (利用 1 有 2 無)
14. 障害者サービス (知っている 1 Yes 2 No) (利用 1 有 2 無)
15. 読み聞かせ・お話し (知っている 1 Yes 2 No) (利用 1 有 2 無)

問18 図書館に対して持っているイメージをご自由にお書きください。

問19 図書館員に対して持っているイメージをご自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました。

図書館利用等に関するアンケート（２）

学籍番号	
------	--

研究調査法の講義を受けた成果を計りたいと思います。まず、現時点のあなたの情報収集や図書館活用についてお尋ねし、それを受講後の状態と比較をしたいと考えています。第1回アンケートに引き続き、ご協力お願いいたします。なお、ご記入いただいた内容は研究調査以外の目的に使用することはありません。

- *学籍番号を必ずご記入ください。
- *該当する番号に○をつけてください。
- *次回の講義でご提出ください。

I 高校時代の図書館の利用について

- 問1 高校時代には何のために学校図書館を利用しましたか。（複数回答可）
- | | |
|-------------------|----------------------|
| 1. 利用しなかった | 2. 宿題（授業の課題）のための調べごと |
| 3. レポートの準備 | 4. 趣味や娯楽の読み物を借りる |
| 5. 進路情報を得るため | 6. 自習 |
| 7. レッスンサービスを受けるため | 8. ILL（図書館間相互利用） |
| 9. くつろぐため | |
| 10. その他（ | ） |

- 問2 高校の図書館を利用してみてどう感じましたか。（複数回答可）
- | | |
|-----------------------|----------------------|
| 1. とても役に立つ | 2. あまり役に立たない |
| 3. 新しい情報との出会いがある | 4. 古い資料ばかりだった |
| 5. 資料が探しやすい | 6. 資料が探しにくい |
| 7. うまく資料が探せなかった | 8. 図書館をもっと使いこなしたい |
| 9. 図書館員に質問するのがはずかしい | 10. 図書館員は信頼がおけ頼りになった |
| 11. 図書館員の手をわずらわせるのが悪い | |
| 12. その他（ | ） |

- 問3 高校の図書館でどのようにして資料を探したか教えてください。（複数回答可）
- | | |
|----------------------|--------------|
| 1. 探さなかった | 2. OPACを使う |
| 3. カード目録を使う | 4. 直接書架で探す |
| 5. 図書館員に尋ねる | 6. 友達に聞く |
| 7. 先生に聞く | 8. 書誌・索引誌を使う |
| 9. CD-ROM版の書誌・索引誌を使う | |
| 10. その他（ | ） |

- 問4 高校の図書館で、図書館員にどんな質問をしたのか教えてください。（複数回答可）
- | | |
|----------------|-----------------------|
| 1. 質問しなかった | 2. 図書館の利用について（開館時間など） |
| 3. 資料の所在（配架場所） | 4. 資料所蔵の有無 |
| 5. 資料の探し方 | 6. OPACの検索方法 |
| 7. CD-ROMの使い方 | 8. その他（ |

II 大阪女学院短期大学に入学して

- 問5 女学院に入学して図書館の機能で初めて知ったことを教えてください。（複数回答可）
- | | |
|------------------|--------------------------|
| 1. 初めて知ったことは何もない | 2. 図書館員が資料の探し方を教えてくれる |
| 3. 図書館員に質問してもいい | 4. 複写サービス |
| 5. ILL（図書館間相互貸借） | 6. OPACで使いが探せる |
| 7. 図書館オリエンテーション | 8. CD-ROMが利用できる |
| 9. 貸出サービス | 10. 館内閲覧 |
| 11. ビデオ等が視聴できる | 12. いろんなテーマのパス・ファインダーがある |
| 13. 資料貸出の予約ができる | 14. 資料購入のリクエストができる |
| 15. その他（ | ） |

III OPACの利用について（先週までについて）

- 問6 大阪女学院図書館のOPACを使ってみてどう感じましたか。（複数回答可）
- | | | |
|------------|--------------|-------------------|
| 1. 利用しなかった | 2. わかりやすい | 3. カード目録の方が使いやすい |
| 4. わかりにくい | 5. あまり役に立たない | 6. コンピュータを使うことが不安 |
| 7. 便利 | 8. コンピュータが嫌い | |
| 9. その他（ | | ） |

- 問7 何のためにOPACを利用しましたか。（複数回答可）
- | | |
|---------------|----------------------|
| 1. 利用しなかった | 2. 宿題（授業の課題）のための調べごと |
| 3. 論文やレポートの準備 | 4. 趣味や娯楽の読み物を探す |
| 5. その他（ | ） |

- 問8 どの項目を使って資料を探しましたか。（複数回答可）
- | | | | |
|--------------|-------------|--------------|-------|
| 1. タイトル | 2. 著者名 | 3. 分類番号 | 4. 件名 |
| 5. 出版社 | 6. 出版年 | | |
| 7. 複合検索（AND） | 8. 複合検索（OR） | 9. 複合検索（NOT） | |

IV CD-ROMの利用について

問9 どこでCD-ROMの利用しましたか。(複数回答可)

1. 利用しなかった 2. 大阪女学院図書館 3. 公共図書館
4. 他大学の図書館 5. その他()

問10 利用したCD-ROMを教えてください。(複数回答可)

1. 利用しなかった 2. J-BISC 3. N-BISC
4. Readers' Guide to Periodical Literature 5. CD-HIASK
6. 雑誌記事索引 7. World Book Encyclopedia
8. その他()

問11 高校までにおいて、CD-ROMを利用したことがありますか。

1. はい 2. いいえ

問12 CD-ROMを利用してみてどう感じましたか。(複数回答可)

1. 利用しなかった 2. わかりやすい 3. コンピュータが嫌い
4. わかりにくい 5. あまり役に立たない 6. コンピュータを使うことが不安
7. 便利 8. 冊子体の書誌・索引誌の方が使いやすい
9. その他()

V 他機関の利用について

問13 大阪女学院図書館以外の図書館や情報提供機関を利用しましたか。

1. 利用しなかった 2. 利用した(機関名:)

問14 問13で利用したと答えた方にお尋ねします。利用にあたり、大阪女学院図書館で紹介状をもらいましたか。

1. はい 2. いいえ

問15 何のために他機関を利用しましたか。(複数回答可)

1. 利用しなかった 2. 宿題(授業の課題)のための調べごと
3. 論文やレポートの準備 4. 趣味や娯楽の読み物を借りる
5. 自習 6. レファレンスサービスを受けるため
7. その他()

学籍番号

VI 研究調査法について

問16 講義の感想をお答えください。

1. 講義内容が (1. 難しい 2. 簡単すぎる 3. ちょうどよい)
2. 内容量が (1. 多すぎる 2. 少なすぎる 3. ちょうどよい)
3. 講義の進み方が (1. 速すぎる 2. 遅すぎる 3. ちょうどよい)
4. 講義は (1. 今、役に立っている 2. 今後役に立ちそう
3. 役に立たない 4. どちらともいえない)

問17 教材についてお答えください。

1. 配布資料は (1. 難しい 2. 簡単すぎる 3. ちょうどよい)
2. ビデオは授業の参考に (1. なった 2. ならない 3. どちらともいえない)

問18 課題についてお答えください。

1. 課題の量が (1. 多すぎる 2. 少なすぎる 3. ちょうどよい)
2. 課題に取り組むことが講義を理解する助けに (1. なった 2. ならない)

問19 その他感想等、何でもご自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました。

図書館利用等に関するアンケート（3）

学籍番号	
------	--

研究調査法の受講、お疲れさまでした。みなさんの受講前、受講開始直後にも情報収集や図書館活用についてお尋ねしましたが、それを現在の状態と比較をしたいと考えています。第1回、2回アンケートに引き続き、ご協力をお願いいたします。なお、ご記入いただいた内容は研究調査以外の目的に使用することはありません。

- *学籍番号を必ずご記入ください。
- *該当する番号に○をつけてください。
- *研究調査法の試験日にご提出ください。

I 大阪女学院図書館の利用について

問1 何のために大阪女学院図書館を利用しましたか。（複数回答可）

1. 利用しなかった	2. 宿題（授業の課題）のための調べごと
3. レポートの準備	4. 趣味や娯楽の読み物を借りる
5. 進路情報を得るため	6. 自習
7. レファレンスサービスを受けるため	8. ILL（図書館間相互利用）
9. くつろぐため	
10. その他（	）

問2 大阪女学院図書館を利用してみてどう感じていますか。（複数回答可）

1. とても役に立つ	2. あまり役に立たない
3. 新しい情報との出会いがある	4. 古い資料ばかりだった
5. 資料が探しやすい	6. 資料が探しにくい
7. うまく資料が探せなかった	8. 図書館をもっと使いこなしたい
9. 図書館員に質問するのがはずかしい	10. 図書館員は信頼がおけ頼りになった
11. 図書館員の手をわずらわせるのが悪い	12. 資料が少ない
13. その他（	）

問3 大阪女学院図書館でどのようにして資料を探したか教えてください。（複数回答可）

1. 探さなかった	2. OPACを使う
3. カード目録を使う	4. 直接書架で探す
5. 図書館員に尋ねる	6. 友達に聞く
7. 先生に聞く	8. 書誌・索引誌を使う
9. CD-ROM版の書誌・索引誌を使う	
10. その他（	）

問4 大阪女学院図書館で、図書館員にどんな質問をしたのか教えてください。（複数回答可）

1. 質問しなかった	2. 図書館の利用方法について（開館時間など）
3. 資料の所在（配架場所）	4. 資料所蔵の有無
5. 資料の探し方	6. OPACの検索方法
7. CD-ROMの使い方	8. その他（

II 研究調査法の科目を修了して

問5 図書館の機能で初めて知ったことを教えてください。（複数回答可）

1. 初めて知ったことは何もない	2. 図書館員が資料の探し方を教えてくれる
3. 図書館員に質問してもいい	4. 複写サービス
5. ILL（図書館間相互貸借）	6. OPACで資料が探せる
7. 図書館オリエンテーション	8. CD-ROMが利用できる
9. 貸出サービス	10. 館内で資料の利用が自由にできる
11. ビデオ等が視聴できる	12. いろんなテーマのパス・ファインダーがある
13. 資料貸出の予約ができる	14. 資料購入のリクエストができる
15. その他（	）

III OPACの利用について（研究調査法の科目を修了した現在）

問6 大阪女学院図書館のOPACを使ってみてどう感じていますか。（複数回答可）

1. 利用しなかった	2. わかりやすい	3. カード目録の方が使いやすい
4. わかりにくい	5. あまり役に立たない	6. コンピュータを使うことが不安
7. 便利	8. コンピュータが嫌い	
9. その他（		）

問7 何のためにOPACを利用しましたか。（複数回答可）

1. 利用しなかった	2. 宿題（授業の課題）のための調べごと
3. 論文やレポートの準備	4. 趣味や娯楽の読み物を探す
5. その他（	）

問8 どの項目を使って資料を探しましたか。（複数回答可）

1. タイトル	2. 著者名	3. 分類番号	4. 件名
5. 出版社	6. 出版年		
7. 複合検索（AND）	8. 複合検索（OR）	9. 複合検索（NOT）	

学籍番号

VI 研究調査法について

問15 講義の感想をお答えください。

1. 講義内容が (1. 難しかった 2. 簡単すぎた 3. ちょうどよかった)
 2. 内容量が (1. 多すぎた 2. 少なすぎた 3. ちょうどよかった)
 3. 講義の進み方が (1. 速すぎた 2. 遅すぎた 3. ちょうどよかった)
 4. 講義は (1. 役に立った 2. 今後役に立ちそう
 (複数解答可) 3. 役に立たない 4. どちらともいえない)

問16 教材についてお答えください。

1. 配布資料は (1. 難しかった 2. 簡単すぎた 3. ちょうどよかった)
 2. ビデオは授業の参考に (1. なった 2. ならなかった 3. どちらともいえない)
 3. 小論文を書くことは (1. 役に立ちそう 2. 無駄 3. 分からない)

問17 プロジェクト(宿題)についてお答えください。

1. プロジェクトの量が (1. 多すぎた 2. 少なすぎた 3. ちょうどよかった)
 2. プロジェクトに取り組むことが講義を理解する助けに (1. なった 2. ならなかった)

問18 その他感想等、何でもご自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました。

IV CD-ROMの利用について

問9 どこでCD-ROMの利用しましたか。(複数回答可)

1. 利用しなかった 2. 大阪女学院図書館 3. 公共図書館
 4. 他大学の図書館 5. その他()

問10 利用したCD-ROMを教えてください。(複数回答可)

1. 利用しなかった 2. 「J-BISC」 3. 「N-BISC」
 4. Readers' Guide to Periodical Literature 5. 「CD-HIASK」
 6. 「雑誌記事索引」 7. World Book Encyclopedia
 8. その他()

問11 CD-ROMを利用してみてどう感じていますか。(複数回答可)

1. 利用しなかった 2. わかりやすい 3. コンピュータが嫌い
 4. わかりにくい 5. あまり役に立たない 6. コンピュータを使うことが不安
 7. 便利 8. 冊子体の書誌・索引誌の方が使いやすい
 9. その他()

V 他機関の利用について

問12 大阪女学院図書館以外の図書館や情報提供機関を利用しましたか。

1. 利用しなかった 2. 利用した(機関名:)

問13 問13で利用したと答えた方にお尋ねします。利用にあたり、大阪女学院図書館で紹介状をもらいましたか。

1. はい 2. いいえ

問14 何のために他の図書館や情報機関を利用しましたか。(複数回答可)

1. 利用しなかった 2. 宿題(授業の課題)のための調べごと
 3. 論文やレポートの準備 4. 趣味や娯楽の読み物を借りる
 5. 自習 6. レファレンスサービスを受けるため
 7. その他()

資料3：研究調査法1998年度スケジュール

	Class Work	Assignments
1*	Introduction 情報と人間 論文のまとめ方10steps ワープロの基礎 w	P1「私と図書館」w S1：論文のテーマ探し アンケート
2*	図書館：種類、資料、分類 ビデオ「新図書館の達人」1 自館内資料の探し方：OPACの利用法、複合検索 文献リストの作成：書誌データ、配列（日、英）w	P2：OPAC 練習問題 P3：文献リスト w
3*	素早く情報を探す：レファレンス・ブックの活用 種類、索引、凡例 World Book E. (CD-ROM)	P4：レファレンス練習問題 S2：事前調査 (キーワード・リスト) w
4*	より広く資料を探す：二次資料の使い方、書誌 J-BISC (CD-ROM)：統制語と自然語、複合検索、 アウトライン w、リクエスト	S3：仮アウトライン w S4：文献カード(B7図書)
5*	新しい情報を探す：雑誌記事索引誌、 「雑誌記事索引」(CD-ROM)、複合検索、	S4：文献カード (B7雑誌記事) P5：新聞記事収集
6*	批判的な資料の読み：新聞記事を例に 新聞記事索引 (CD-ROM, Online, Web)	S6：情報カード(B6)
7*	インターネット上の情報源 資料評価 アウトライン 序文、仮説	S7：最終アウトライン w S8：仮説作成 w
8*	情報の記録：日本語 ワープロの基礎	S8：論文の一部作成 w S9：出典表示 w 引用文献目録 w
9*	情報の記録：英語 英語情報の探し方：Rraders' Guide to P. L., BIP	P6：英文資料収集 文献リスト w
10	新しい動き、まとめ	S10：Final Copy 提出 w

評価法：毎時間に課される課題の提出+自由テーマの小論文提出